

「経済同友会十五年史」の執筆を頼まれてから、まる一年半ぶりにようやく脱稿したのである。多忙にとりまされ、予定より一年おくらせてしまったことをお詫びしなければならぬ。しかも、だいたい昭和三十七年の一月ごろまでの動きを対象にしたのであるから、本当のところ、これは十六年史なのである。しかし、それでは区切りが悪いので「十五年史」とした。つぎの「二十年史」の編纂にあたっては、重複しても、十六年目すなわち昭和三十六年度から出発してもらった方が適切だと思う。

私は、さきに「経済同友会十年史」を書いた。昭和二十一年四月からの十年である。戦後の政治、経済、労働の諸情勢が混沌としていた時代から、ドッジ・ライン、朝鮮動乱、講和条約発効、独立、二十九年の不況、三十年の上昇局面と、まさに波乱に富んだ時代であった。ことに経済同友会創立後の数年間というものは、諸情勢が錯綜していたうえに、会自体の記録も資料も不備であった。その後の数年についても、客観情勢は決して平坦ではなかった。そうした情勢と会の動きとをからみあわせて、しかも一本の線を通してゆくことは、一種、原野を切り拓いてゆくような楽しみがあったが、それだけに困難な仕事であった。

それにくらべると、最近の五年間は、二つの大きな景気の起伏があつたにしても、日本の政治、経済の土台が一応、基本的には安定した状態にあるのだから、事柄は比較的単純であった。しかも会の資料も記録も、よほど整備されている。したがって、こんどの作業は「十年史」にくらべて、いわば、やさしかったが、それだけに妙

味は薄かつた。しかし、それでも一つの活きた存在としての経済同友会が、波荒い景気変動の中を、一方に不安定な政情をにらみつつ、高い理想を目指して活動し発展してゆくさまは、なんといつても一つの壮観である。その活動、発展の歩みの中に美しい一本の線を見出だし、育てあげてゆくことに、最近の五年史をまとめる大きな喜びを、私は感じたのであつた。とくに客観情勢が、基本的に強い土台のうえにあればあるほど、それを背景とする経済同友会の活動が、幅広く、しかも底深いものとなるのは当然のことである。議会政治擁護、経営者の社会的責任の自覚と実践の線を貫いてゆく活動の壮大な展開、近年における国際的活動の積極化は、その顕著な例である。本篇冒頭の「経済同友会の十五年」では、それら最近の五年の歩みの骨格をなすものを、それ以前の十年の活動のあり方、とくに創立の精神との関連において、系統的にとらえようとしたものである。

私は、経済同友会十五年の足どりをふり返つてみて、大きな善意に充ち、熱情あふれる模範的な経営者のゆかしい薫と、はつらつとした息吹きを感じた。彼らは、難局にひるまず、太平におごらず、つねに、よりよき日本を築いてゆくことに精進してきたのであつた。そして、その努力の根底には、はつきりした指導精神を持つていた。いかえれば、経済同友会の行動の展開は、つねに指導精神の発展によつて裏づけされてきたのである。時代とともに生き、時代の一步先きを見つめてゆく経済同友会の今後の前進を信じて巻末のことばとする。

昭和三十七年四月

羽間 乙彦